



キャンパス/東京都千代田区、新宿区 学生数/13,333人 創立/1913年  
 建学の精神/For Others, With Others —他者のために、他者とともに—  
 学部/神、文、総合人間科学、法、経済、外国語、総合グローバル、国際教養、理工  
 大学院/神学、哲学、文学、実践宗教学、総合人間科学、法学、経済学、言語科学、グローバル・スタディーズ、理工学、地球環境  
 学、応用データサイエンス学位プログラム、助産学専攻科  
 THE世界大学ランキング2024/1501+位、同日本大学ランキング2023/=22位、同インパクトランキング2023/401-600位

DP 全学、各学部、各学科のDPを設定し、DPの下位に科目ごとの「到達目標」を置く

教学マネジメントにおける学生のDP到達度測定

	入学時調査*2	在学時調査*3	卒業時調査*4	卒業後調査*5	
1 学生調査 (間接評価)	DPの能力	・知っている ・身に付いている ・もっと身に付けたい	・能力が伸びた ・もっと伸ばしたい ・成長を促すカリキュラムだと思う	・能力が伸びた ・もっと伸ばしたかった ・成長を促すカリキュラムだった	・身に付いた ・もっと身に付けたかった ・社会に必要な能力だと思う
	学生生活等	・学生生活で期待すること など	・キャリア意識 など	・就職活動の振り返り	・現在の就労状況 など
	満足度等	・入学動機 など	・上智大学の推奨度 など	・上智大学の推奨度 など	・現在の就労先の満足度 など

2 大学授業アンケート (間接評価)	〈全学共通質問〉	・教員の説明のわかりやすさ ・教員の意欲の高さ ・質疑応答やフィードバックの機会の多さ ・アクティブ・ラーニングの機会の多さ ・学修内容の応用方法を学ぶ機会の多さ ・多様なものの見方や考え方の身に付き度合い	・自身の主体的な取り組み度合い ・シラバスで示された到達目標の身に付き度合い ・知的な刺激、勉強意欲の喚起の度合い ・授業時間外に費やした時間 ・この授業の満足度 ・良い点・改善が必要な点	〈学部・学科・センターによる 独自質問〉
	+			

3 教育課程・学修成果10指標 (直接評価)	指標1 修得単位数	指標6 ナンバリング毎の科目数とレベル毎のGPA
	指標2 平均登録単位数/平均修得単位数	指標7 全学共通科目と学科科目のGPA散布図
	指標3 認定学年別GPA(箱ひげ図)	指標8 DP別科目数
	指標4 自学科開講科目のGPA分布	指標9 DP別修得単位数
	指標5 自学科開講科目数と必修選択区分毎のGPA	指標10 DP別GPA平均

注目 「学生職員」がサステナビリティ活動推進役、キャンパスづくりや広報を担う

上智大学では、教学マネジメントだけでなく、グローバルエンゲージメントとして掲げているSDGsの取り組みにも、学生が関与している。SDGsを主管するサステナビリティ推進本部では、2021年秋から「学生職員」を雇用。この制度に応募した100人以上の学生の中から選考を通過した12人が、専任職員と共に週10時間以上の業務を行う。給与は時給制で支払われる。

学生職員は広報媒体やSNSを通じた情報発信、学生視点を生かしたキャンパス改善、イベント企画などを担う。これまでに、ユニバーサルデザイン視点でのキャンパス案内サインの整備、マイボトル運動推進の一環としてのウォーターサーバー追加設置などに取り組んだ。学内のSDGs関連活動のエビデンス収集を行い、THEインパクトランキング\*6のランクインにも貢献している。

「理想のキャンパスをつくるために、学生が学生にヒアリングし、企画を立てて、他の学生に活動を呼びかける。学生職員は、本学が特に力を入れて育成している“主体性”を象徴する活動だ」と伊呂原副学長は述べる。



学生職員が中心となり、上智のアイデンティティとユニバーサルデザインを両立させたキャンパス案内サインを設置

利用率調査の結果を基に、給水ステーションを増設

\*2 入学時学生意識調査 \*3 在学時学生実態調査 \*4 卒業時成長実感調査 \*5 卒業後動向実態調査  
 \*6 Times Higher EducationによるSDGsを指標としたランキング

CASE STUDY

全学生のDP達成度100%をめざす学修者本位の教学マネジメント

上智大学

学生のDP達成をゴールと位置付けて「学修者本位の教育」を追求する上智大学。学生の実感を重視した測定方法に客観的な指標も加え、達成度を両面から検証する。



学務担当副学長 理工学部情報理工学科 教授 伊呂原 隆

いろはらかし ●早稲田大学大学院理工学研究科博士後期課程修了。博士(工学)。早稲田大学理工学部助手、上智大学理工学部准教授などを経て、2010年理工学部情報理工学科教授。入学センター長、学事センター長などを経て2021年4月より現職。

DPと科目の整合性を確認し関係を明確化

学生はそつなく課題をこなし、卒業後に世界中で活躍——教育の質に大きな問題を感じていなかったが故に、本学は「教育者本位」だったかもしれません。試験の成績で学修成果がわかると考えていました。

しかし、2010年代半ば、「学修者本位の教育への転換」が強調され始める中、DPの達成度を確かめていないことに気づきました。DPは、本学の卒業生の質を社会に対して約束するもの。学生は本当に力が付いた実感を待っているのか。その疑問を起点に学修者視点で教育の質を保証しようとして、2021年からDP達成に向けたしくみの設計を始めました。まず確認したのが、DPとカリキュラムの整合性です。各科目が

育成するDPの要素を一覧にしたカリキュラムマップを学科・専攻ごとに作成。横軸をDPの各要素、縦軸を育成レベルとして科目を配置したカリキュラムマップも整備しました。どの科目でいかなる力を育てるのか、各学科・専攻で議論が起り、DPに対する各科目の役割分担が明確になって、偏りも是正されました。

授業アンケートの意外な結果と改善方針

2022年度から、学生調査と授業アンケートで学修成果を測定しています。IR推進室が主管する学生調査はDP達成度を学生が自己評価するもの。身に付いた力を学生が語らなければ学修成果とは言えないため、主観的な認識を重視しました。その結果、成績はよくても、学生本人に力が付いた実感は伴っていないDPの要素も見つかりました。現在、学生が成長実感を持てるような授業のあるべき姿について検討しています。

授業アンケートはFD委員会が全学的に実施。DPと科目をひもづけたからには、全学統一の基準で質を見る必要があるとの考えからです。学生の評価が高いのは、私たちが予想した「単位修得が楽な

授業科目」ではなく、「単位修得は難しくても知的な刺激がある授業」でした。また、主体的に取り組む学生ほど、到達目標の達成度が高いことも判明。授業改善の方針として、「知的刺激」「主体性」といった学生目線のキーワードが見えてきました。学生に対する結果の共有は、アンケートのキャッチフレーズ「We make Sophia」を添えて、キャンパス内のめだつ場所にポスターを貼り出しました。「自分たちの声で上智大学を変える」という意欲の高まりを期待しています。

これら2つの間接評価に加え、直接評価として2023年度に設定したのが、DP、GPA、修得単位数などを掛け合わせた指標群「教育課程・学修成果10指標」です。これにより、学生の実感に加え、教務データの面からも学修成果を把握。卒業時に主観的にも客観的にもDPを達成できたと見える状態になります。また、GPAを分析すると各DPの育成度の違いがわかるため、学修者を軸とした教学マネジメントにつながります。学生には、DPで定めた力を身に付けたという自信を持って巣立ってほしい。大学側は、その力を生かして世界各地でリーダーとして活躍する卒業生を増やし、社会との約束を果たしていきます。

\*1「Sophia」は上智大学の愛称

取材・文/児山雄介 撮影/木藤富士夫